

成田敦子

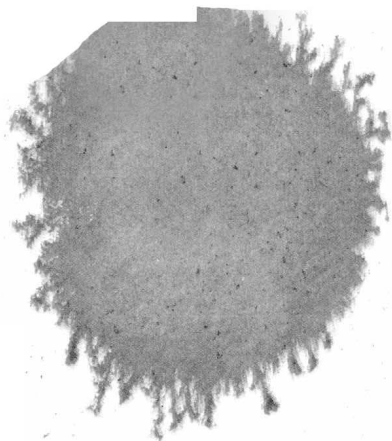
ガンと闘う母から娘へ

チーちゃん、ごめんね

成田敦子

ガンと闘う母から娘へ

チーちゃん、ごめんね



チーちゃん、ごめんね

ガンと闘う母から娘へ

★定価はカバーに入っています

〈検印省略〉

著者 成田 敦子

発行者 豊島 激

印刷者 日本製版株式会社

発行所

株式会社 光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話 東京(烈)〇二三八番
振替 東京 812913番

落丁乱丁本お取替いたします

目次

△はじめに▽

私はガンになった

五

△第一章▽

チーちゃん、ごめんね

一五

△第二章▽

娘に弟をのこしてやりたい

二五

△第三章▽

神様、まごころをください

三五

△第四章▽

鉛色に染まってきた手

四〇

△第五章▽

鏡の前に知らない女がいる

一三三

△第六章▽

ママはいちばん美人

三九

△第七章▽

エーゲ海へ行ってみたい

一六二

△第八章▽

コンドルは飛んでいく

一八五

△録音▽

私はガンになった

二〇三

△おわりに▽

バラの絵のある手紙

二三

鎌内啓子

装
幀

上
口
腔
人

△はじめに▽

私はガンになった

《——ガンから何を想像なさいますか？

「ガンはおっかない」

「ガン？ わーっ、いやだ」

——ガンから何を連想なさいますか？

「ガン？ 死亡だよ」

「もうあれはいやですね。静かにさせてあげられるものならと思いますよ、もう助からないなら。本当になんというんですか、早く迎えが来てほしいっていいましたね」

「でも、あの病気はみじめでございますよね。今、目を閉じるまで正気でございましょう」

私もそう思った。

でも、そのガンになってしまった——。》

（ラジオ特集「私はガンになった」 語り手・成田敦子 日本文化放送47年10月15日放送から）

成田敦子^{あつこ}さんの職業はアナウンサーである。昭和十六年、東京で生まれた。

青山学院から、早稲田大学の仏文科に入学。在学中は放送研究会に籍を置き、卒業と同時に文化放送に入社した。

同期のアナウンサーには、今もテレビで活躍している土居まさる氏がいた。深夜放送の「東京ミッド・ナイト」「走れ！ 歌謡曲」などのディスクジョッキーとして活躍するほか、硬派の報道番組も担当した。

成田さんが病魔に襲われたのは四十六年のことである。病名は乳ガン——。その手術の体験をもとに、患者である成田さん自身の取材とインタビューで、ラジオ特集「私はガンになった」という番組が作られた。

四十七年の十月に文化放送から放送されたのだが、最初に紹介したのが、その番組の冒頭の部分である。また、その番組のなかで、成田さん自身、自分の病気について、次のように語っている。

《昭和四十六年十二月二十五日、私は乳ガンの手術を受けた。

乳房の上にしこりを発見したのは、四月ごろだから、なんと八カ月もほっておいたことになる。

理由は、ガン年齢からほど遠い二十九歳という若さだったこと、仕事が忙

しかったこと、それと、家族の乳ガンの手術に立ち会ってその残酷なシーンを知っていたので怖かったということもあります。

そして十二月二十五日、手術台にのばりました。

麻酔が醒めた時、私はガンであったことを知りました。

でも、医者はなにも言いませんでした。そのうち、私はガンであること以上に、ガンという言葉を避ける医者や看護婦の態度に苛立ちを感じはじめたのです。

術後二週間目、私は放射線治療を受けはじめました。そこで初めて、医者から、ガンであることを知らされました》

成田さん自身が指摘し、反省しているように、このころは、多忙をきわめていた。いいかえれば仕事が面白くて、どうしようもない時期だった。俗な言い方をすれば、のつていたのである。

昭和四十三年から始まった「走れ！ 歌謡曲」は深夜の午前三時から五時まで、生放送によるディスクジョッキーの番組だった。

今のことばでいえば、成田さんはパーソナリティということになるが、

そのころは、まだそんなしゃれたことばはなかったはずである。

ちょうど深夜放送の第一期黄金時代ともいうべきところで、落合恵子、美川玲子さんなどと一緒に、成田さんは水曜日の夜、というより、正確には木曜日の朝の担当だった。

ファンは若者だけでなく、大人にも成田さんの語りを楽しみにしている人が多かった。受験生も、もちろん多いが、不思議なことに成田さんの語りは、夜を徹して運転する深夜便のトラックの運転手に人気があった。

やや、べらんめえ口調で、威勢のいい成田さんの語り口が、孤独な街道をひた走るドライバーのすきみがちな心をやわらげていたに違いない。

落合恵子さんに、「レモンちゃん」の愛称があるように、成田さんも「ひょうたんナマズ」というニックネームで親しまれていた。

ひょうたんでナマズを生け捕りにするように、つかまえどころがないという意味で、口の悪い同僚からつけられたのだそう。

四十六年六月というから、乳ガンの手術を受ける半年前、番組に寄せられたファンからのリクエストカードや投書をもとに、「話そう夜あけまで」という本を光風社書店から出版している。

《夜明け前の、たった二時間のあいだに、電波はなんとたくさんいろいろな友だちをつくってくれたことでしょう。ただ電波は形のない、その場限りのものでしょう？ 何かむなしくてね。それで書いてみたんです》

成田さんは、書くことが好きだった。あけ方、姿の見えない多くの人たちに語りかけるむなしさが、活字の姿を追い求めていったのにちがいない。

四十年に、大学時代、演劇部で一緒だった康彰氏と結婚した。康彰氏は電気関係の商社の営業マンで、多忙の身だ。

四十一年には二人のあいだに一粒種の知菜子ちゃんちさこが生まれた。愛称チーちゃん。二人が仕事に出たあとは、康彰氏の母親がチーちゃんの面倒をみるという生活が続いた。

成田さんは、「夫や子どもがいるからといって、打ち合わせをサボることはできない。エンゲージリングはそのための免罪符ではないはずだ」と、いつて、仕事に出かけるとき、エンゲージリングをつけていなかった。やはり夫や姑ははのあたたかい理解があったからだろうし、そのことは成田さん自身が一番よく気づいていたに違いない。

乳ガンの手術を受けた四十六年の暮れ、クリスマスから正月にかけて入院生活を送ったので、成田さんは家に帰ることができなかった。

《チーちゃん「さびしい時と、楽しい時があるでしょ。さびしい時とはとても悲しいことでしょ。それから、楽しいことはとってもうれしいことなのよ、ね」

ママ「悲しいこと、あった？」

チーちゃん「あのね、ママがいないとき」

ママ「ママがいなくなつてパパやおばあちゃんがいるじゃない」

チーちゃん「でも、ママ、いちばん大好き、おうちのなかで。だって、ママ、美人じゃないの」《私はガンになった》

手術後の経過は順調だった。二カ月ほど会社を休んだだけで、仕事も元通りやれるようになった。四十七年春、文化放送を退社して、フリーのアナウンサーとなる。組織からはなれ、自分の可能性をさらに探りたかったからだという。フジテレビのワイドショーの司会やラジオ関東で「ミュージック・

ジョイ」などの番組を担当した。

四十八年の秋には、文化放送の鎌内啓子ディレクターとヨーロッパ旅行に出かけるほどに、体力も回復してきた。かつての同僚、鎌内さんは、成田さんの大学の後輩でもあり、ディレクターとアナウンサーという立場で一緒に仕事をした無二の親友である。「私はガンになった」というラジオ特集も、鎌内さんのすすめで、出来たものだ。

鎌内さんは、「ちょっと酷こかなと思いましたが、折角の機会ですから、彼女を励ましてやってもらったのです」と、語っている。

四十九年の夏、成田さんは、突然、「背中が痛い」といい出した。

手術以来、定期的に検査も受けてきたので、別にたいして心配もしていなかったようだ。がん研へもいつてみたが、これといって異状があったわけでもない。

そのうち頭痛がひどくなってきた。頭痛薬を飲んでも、痛みはとれない。肩もこってきた。いくらマッサージしても、楽にならない。東洋医学のハリ治療も受けてみたが、効果はあがらなかった。

成田さんの日記はその頃から始まる。

